うたった八首中の一首。下句は車好きならではの表現。ポルシェ讃歌である。

がらんどうの空となりたる野分あと黒き礫のやうに
飛ぶ鳥　由田欣一

「枯枝に烏のとまりけり秋の暮」という芭蕉の句を思い起こす。水墨画のような、モノクロームの絵のような世界をうまく実現。動きを表現した下句もいい。

張りつめた声にて歌う海のファド漁の夫を待つ妻の
歌　鵜沢梢

ポルトガル旅行の旅行詠の中の一首。他の作はいわゆる観光の歌だが、この一首は、やや違う。異文化を肌で感じた、感覚をうたっている。カナダに住む作者だが、リスボンで異文化を感得したのである。

昇り来し陽もむら雲にかくれゆき答志島菅島かすみ
の中に　嶋久子

陽の出から数十分の海の風景である。雲そして霞が隠す太陽と島。風景が動きとして表現されている点が印象的な一首。二島は鳥羽の沖の島だが、どの角度から見た風景か、小生には分からない。

いぢめらるる側も悪いと言ふ人の子が繰り返す差別
の嵐　山口明子

いじめ問題に対応する教師の歌。自分の子をかばって教師に文句を言う親への対応に苦慮しているらしい場面が読める。こういう職業にかかわる現場の歌は、大切に考えてゆきたい。ただ、「差別の嵐」は、詩の表現としては抽象的にすぎるのが惜しい。

もう空を見上げぬ群れを満月は花火の消えた空に見
下ろす　大谷ゆかり

花火そのものではなく、また花火を見上げる群衆ではない。花火が終わって帰ってゆく群衆をうたう。取材感覚がいい。花火が終った時点だということを暗示の仕方の工夫が秀抜。

南部乗る伊号潜水艦真珠湾へ連合艦隊を先導したり
後藤秀彦

「心の花」会員だった故南部隆則氏に取材した一連中の一首。たしか七〇年代ごろまでは「心の花」の歌会にも参加され、私も何度かお会いしたことがあるが、具体的な軍人としての履歴までは知らなかった。一首、ドキュメンタリー・タッチでうたおうとしているのはいいが、現在形を採用した点、もう一工夫必要かもしれない。

カボス搾り生牡蠣食ぶこの秋に宇宙旅行の予約はじ
まる　須田昌子

スペース・アドベンチャーズ社はロケット開発を行っているアルマジロ・エアロスペース社と提携して宇宙旅行を具体化した。日本ではＪＴＢ社が予約販売を開始したという。上空百キロまで行って、五分ほど無重力飛行が体験できるらしい。九百五十万円。作者は、もしかしたら早速予約したのではないか。